校 長 室 だ よ り(No.5)

令和３年５月19日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

多様性を認め合うことの大切さを、その著書「学問の冒険」で記された河合雅雄さんが亡くなられました。氏は「雑木林には四季に応じてさまざまな生き物の姿がある。」「…明るい生き生きとした生活空間は、生物の種と個体という二つの生命の謳歌が感じられ、…」と言われています。

生物は、限りある自然環境の中でお互いにかかわりあって生きている。つまり「多様性」「相互性」「有限性」の大切さを述べられていると感じます。

2015年の国連サミットにおいて、先進国を含む国際社会全体の目標として、「持続可能な開発目標(SDGs：Sustainable Development Goals)が採択されましたが、SDGsは、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲットにより構成されています。ESDは、このうち、目標４「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に位置付けられました。

ESDは、ターゲットの１つとして位置付けられているだけでなく、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが第74回国連総会において確認されています。持続可能な社会の創り手を育成するESDは、持続可能な開発目標を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するものとされています。

2016年12月に発表された中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」には、「持続可能な開発のための教育(ESD)は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」とあります。この答申に基づき策定され、 2017年３月に公示された幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領及び2018年３月に公示された高等学校学習指導要領においては、全体の内容に係る前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられています。

持続可能な社会づくりを構成する「6つの視点」

1. 多様性(いろいろある)　2. 相互性(関わりあっている)　3. 有限性(限りがある)
4. 公平性(一人一人大切に)　5. 連携性(力合わせて)　6. 責任制(責任を持って)

これらを学んでいくために「主体的・対話的で深い学び」の視点から、学習・指導方法を改善すること、問題解決的な学習を適切に位置付けることなど、探究的な学習過程を重視し、学習者を中心とした主体的な学びの機会を増やし、体験や活動を取り入れるだけでなく、学習過程のどの部分にどのように位置付けたら効果的かのカリキュラムマネジメントが重要です。また、話し合い活動、協力しての調査や結果のまとめ、発表を行い、「協同的な学び」としていくことが大切です。

このことで、学びを知識・理解に留めず、学びを活かし、様々な問題を「自分の問題」として行動する主体性の育成を目指したいと考えます。また、「持続可能な社会の構築」という観点を意識することにより、児童・生徒の価値観の変容を引き出すことも考えていければと思います。

推進にあたっては、ESDの実施を学校経営方針に位置付け、研修等でも取り上げ、ESDを適切に指導計画に位置付けることや、地域社会や関係機関との連携の視点を取り入れること、児童・生徒による発信と学習成果の振り返りを適切に行い、学びを充実させていくことが重要だと考えます。